**イエスは門なの？ 2017 05 07**

**ヨハネ10:1-10 牧師　安達均**

主イエスの恵みと平安が集まりました会衆の上に豊かに注がれますように

復活節と呼ばれる季節に入っている。復活節は何日あるかご存知だろうか？　７週間だから49日間である。　49日と聴いて、日本での仏教の習慣をご存知の方は、ピントくるのではないだろうか？

仏教での49日はさておき、キリスト教での49日間の復活節というのはどういう期間なのだろうか。復活祭はとかく、お祭り化されてしまって、イースターはその日だけで終わりかのように思われているかもしれない。

しかし、復活が起こった2000年前の状況を振り返るとき、最初にマリアが復活したイエスと出会ったと話しても、弟子たちには復活なんて信じられなかった事実がある。しかし、弟子たちも復活のイエスに会うことを体験し、だんだん信じられるようになっていく期間だったといえる。
この期間中、聖書日課でも礼拝でも日曜日毎に読まれる聖書箇所は、最初の３回は、復活の主、イエスとの出会いということに焦点がおかれている。そして復活節に入って４回目の日曜日、今日はその日にあたるが、イエスと私たちとの深い関係に焦点が移っていく。

ヨハネ福音書10章の1節から10節で与えられている聖書箇所では、イエスは羊と羊飼いのたとえ話をされている。羊は人間であり羊飼いはイエスのこと。　羊は人間に似ているとよくいわれる。　一匹だけでは生きていけないため群れをなす、臆病で、ストレスを受けやすく、迷いやすい。

だから安心を得るには、羊が群れを成すことは必然であり、しかも羊飼いというリーダがかかせない。そのような羊たち、いろいろなところに作ってあった囲いの中へと羊飼いに導かれ、夜を過ごした。

しかし、囲いがあるといっても、どこかに入り口がなければ、囲いの内側には入っていけないし、入っていたものも出ていくこともできないわけで、出入り口つまり門があった。たぶん2000年前の時代の門にも鍵はあったのだろうが、羊どろぼうがが来てしまえば簡単に開けられてしまう鍵だったのだろう。

放牧生活をしていた羊飼いたちはたくさんいた。そして、いろいろな羊飼いたちが自分の羊たちを柵の中において、羊飼いは自分で寝やすい場所を見つけて、寝ていたのだろう。

しかし、イエスは、自らが門であるといわれ、すなわちイエスはその出入り口で羊たちとずっといっしょにいて夜を明かすような、良い羊飼いだと自分のことをたとえた。自らが門となって、羊たちを守る羊飼いを想像して欲しい。

また、羊たちは、次の日になったら、ずっと柵の中にいるわけではなく、水やおいしい草を食べにいかなければいけない。与えられた福音書箇所の最後にイエスが語られた「私がこの世に来たのは、羊が命を受けるため、それも豊かに受けるため」という言葉の意味をよく考えたい。

ここで、命という言葉に訳されている言葉、ギリシャ語の本来の意味からして、生きることの本質とかエネルギーをイエスが与えるという意味にとらえられる。　実は、今日の聖書箇所の次の節、11節になるが、イエスは「わたしは良い羊飼いである。良い羊飼いは羊のために命を捨てる。」とまで話しておられた。

ピンと来る方もいると思う。この言葉をいったいいつの時点で話されたか正確な時を特定することはむずかしいのだが、もちろんイエスが十字架刑にかかる何日も前の時点だった。そして、その通り、イエスは自分を無にして犠牲を払う。

人々の罪、2000年前当時の人々だけの罪というわけではなく、アダムとイブからはじまって、全人類の罪を赦すために十字架にかかられた。旧約聖書・新約聖書を通して、そしてイエスの十字架を通して、神がすべての人類を愛するがゆえ、赦してくださることを知ることができる。　そして、イエスが復活されたことから、神は赦すだけではなく、新しい命へと導いてくださる。

私たちはの人生、羊たちと同じく、迷ったり、うまくいかない事、大失敗をするようなことがあり、導きを必要としている。　そのような私たちを、主は守ってくださり、そして喜びに満ちた命に預かれるように願い導いてくださっている。　一週間を振り返って欲しい。それぞれに、悩みやうまくいかないことを経験された方も多いと思う。　本当に今日、よくここにみなさん来られたと思う。　イエスの守り、導きがあって、いまここにおられる。

そして、皆さんはここに来ただけでは終わらない。今日、今、命の与え主イエスが、新しい一週間に向かって、新しいエネルギーを与えてくださっている。　先週の悩みごとや失敗、恥ずかしい思いは、十字架に架かられた救い主がぬぐってくださっている。主との深い関係の中で、神の憐れみ・いつくしみがその土台にあって、私たち羊は、羊飼いなる主イエスを頼りに、新たな歩みをはじめよう。